京都府の歴史

県史シリーズ 25

赤松俊秀
山本四郎 編著

K
216.2
A31

山川出版社

京都府立図書館
1100285160
16042013

岸に上陸した。しかし三年後の十九年にレイテ島玉砕という運命がまっていた。この十九年、京都市内の一部がB29の空襲をうけたが、ウォーナー博士の勧告で、全京都が爆撃からのがれたことは周知のとおりであるが、第一目標となっていた京都をはずしたのは、陸軍長官スチムソンであるとするほうが正しいと思う（読売新聞社編「昭和史の天皇」）。戦時下の生活については一般的なことだから省略する。

＊ 第十六師団は日露戦争後の軍備拡張で明治三十九年（一九〇六）にできた。中心は伏見の深草で、師団司令部・歩兵第九連隊と特科部隊の騎兵・砲兵・輜重（しちょう）兵の各第十六連隊がおかれ、御香宮の南方に工兵第十六連隊がおかれた（特科部隊は、はじめは大隊）。当時の深草は農村であったが、たちまち軍隊の町と変貌した。深草村は深草町となり、師団街道ができ、京阪電車の藤ノ森駅は〝師団前〟と称した。司令部は現在の聖母女学院である。福知山には歩兵第二十連隊がおかれた。『私のスーちゃん（恋人の意）福知山、二十連隊篭の鳥……』などと流行歌にうたわれた。舞鶴には要塞司令部がおかれた。

7　敗戦と新時代

現役検事の逮捕――占領軍の横暴――

昭和二十年八月敗戦。虚脱状態の京都市民に君臨したのはアメリカ第六軍団司令部（関西全域を支配）である。司令部として大建ビル（現丸紅ビル）が接収された。将校宿舎として御所が接収されかかったが、宮内省が反対して植物園が接収された。

その十二月に次席検事として京都地方区裁判所検事局に赴任した前堀政幸氏は語る（「京都新聞」連載の「戦後史の断章」より。以下この特集をときどき利用）。上司二人が追放になり、責任のおもくなった同氏に、占領軍は『警察に文句はつける、日本の裁判に口をさしはさむ。……しまいに物資調達という名目で裁判所のボイラーや机まで持っていってしまう』。悪質ブローカーやサギ師が軍の

京都駅に着いた進駐軍　昭和20年9月25・26日，米占領軍は京都に進駐し，大建ビル・美術館・勧業館・京都ホテル・都ホテル・関電ビルなどを接収した。

占領軍は、ときに厳罰主義、ときに不起訴を要求する。罪を糾弾する検事が、逆に『善良な市民の弁護士』をつとめねばならぬ。軍の要求を、それはできぬとか事実誤認だとかハネつける。ことわってばかりいてはと、一部を起訴すると、裁判官にも二派あって、みな有罪にしてしまう。軍はそれをみて、前堀は怪(け)しからぬ、起訴さえすればみな有罪になるではないかという。それが大阪高裁にまわると無罪になるので、胸がスッとした。干渉は軍事法廷・占領軍特高警察（CIC）からもくる。

知事の印鑑をだまっておしたヤミ屋がつかまったとき、軍から『あれは自分ところのスパイだから釈放せよ』といってくる。あまりひどいのでGHQに報告したところ、当の司令官コールマンは査問に付された。また二十三年十一月に裁判所職員で上役に賄賂(わいろ)などをおくっていたのを家宅捜索をして取調べにはいったところ、前堀氏が逆に逮捕され、翌日その職員を保釈するという交換条件で、一六時間抑留後釈放された。これが問題となり、終戦連絡事務局長が全国に不当干渉の事例をもとめたところ、一件も申しでるものがなかったという。それほど当時の日本人は占領軍に卑屈であった。